

白鷺千聖と幼なじみの話

いしころ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

もし白鷺千聖に男の幼なじみがいたらこんな感じがいいなと思う話です。

主人公：四宮 匠

ヒロイン：白鷺 千聖

2018/12/29より読み返してみてもおかしいと感じた部分を訂正しています。

大きく文章が変化するかもしれません。

よろしく願います。

目次

駅ホームにて	1
バイト先のカフェにて	3
雨宿りから自宅にて	7
公園にて	17
番外編 クリスマス	20

駅ホームにて

「あら？・四宮くん？」

駅のホームで待つ俺に懐かしい声で話しかけてきた女学生がひとり。

「… 白鷺さんひさしぶりだね。」

「四宮くんこっちに戻ってきてたのね、連絡くれれば良かったのに。」

「高校入学と同じくらいに帰ってきたからどたばだしててできなかったんだ。」

今話しかけてきた彼女は白鷺千聖。

幼い頃から女優として活動している芸能人。

「ほんとに久しぶりね、最後に会ったのは小学生になるくらいかしら？」

「たびたび連絡はとってたから話すのはそうでもないよ。」

「ところで、電話の時と話し方が違う気がするのだけど…、それに目も会わせてくれないし。」

彼女とは小学生に上がる前に知り合い、家が近いこともあってよく遊んでいた。

その頃から女の子として意識していて、親の仕事の関係で引っ越してから電話で何回か話していたけれど顔を合わせるとは一度もなかった。けれど白鷺への気持ちはなくなることはなくテレビや雑誌で彼女を見かけるたびに小さいころの自分の気持ちを断ち切れないう情けなさ、叶わないと心の底から思い知らされる虚無感で胸がいっぱいになっていた。

電話で話していたとはいえ改めて顔を合わせると話し方がぎこちなくなってしまう悪く言えば突き放しているように感じられる話し方になった。

「前からこんな感じだよ、それより今日はお仕事ないの？」

「ええ、今日はお休み。久しぶりにゆっくりできるわ。」

「最近ドラマとか舞台とかよくやってたよね。」

「うれしいことだけれど、なかなか疲れがとれなくて大変ね。」

と言葉では言っているけど嬉しそうな雰囲気は伝わってきた。

「四宮くんは部活とかしないの？」

いつまでも目を合わせようとしめない俺に見かねたのか顔を近づけてくる。

まあさすがに友人として駄目だなと思い、白鷺のほうに顔を向ける。

「…っ、ぶっ部活はいいかな、うち運動部とか厳しいらしいから。」
目で見てやっとなり理解というか認識したというかほんとにあの白鷺千聖本人なんだと、俺が小さい頃遊んでた女の子は成長して素敵な女性になっていったんだと。

あとは、困ったことに会っていなかったから諦めがついていた気持ちを再認識してしまった。

相手は多くのファンを持つこれからが大切な時期の女優、俺みたいな平凡な高校生が手を出していい相手じゃない。

そうは思っているにも血気盛んな高校生、そんなに早く気持ちを整理できるわけではない。

そう思っている間に電車が来た。

白鷺にはこの電車じゃないのかと不審がられたけれど今同じ電車に乗ってこれ以上話していたら何を言い出すのかわからないし、心臓が耐えられなくなりそうだから、適当な理由をつけてその電車には乗らなかった。

別れ際に白鷺は「またね、匠。」

なんてドラマじゃないんだからいきなり下の名前で呼ばないでくれよ…。

バイト先のカフェにて

白鷺と駅で再会した週末、俺はバイト先のスタジオCIRCLEに隣接しているオープンカフェにいる。

うちの高校は基本バイトOK、危ないことしなければいいよってくらいゆるい。

バイトは高校に入ってからすぐに始めた、部活はしたくないけれど放課後なにもしないで過ごしたくはないのでおこづかいも稼げるしと始めたのだが、このカフェ割りとおしゃれでライブハウスも近いことから高校生、さらには女子高が近いこともあって女子高生がよく来る。

特に平日、オープンテラスの席(屋内席なんてないのだが。)は二種類の制服で埋め尽くされる、ここは基本セルフ式なので席のあるほうまでいくことはそんなないけれど、女子高生たちの明るい楽しい声はカウンターにいてもよく聞こえてくる。

今は週末なので制服姿は少なく家族連れやこれからライブ見に来たと言わんばかりの格好をした人たちなどが多くもなく少なくもなく来店し、ゆったりとした時間が流れている。

暇だなーなんて思っていると水色の髪をサイドテールにしているお客さんが来た。

「いらっしやいませー。ご注文はお決まりですか？」

「えっと、アイスティー二つとレモンケーキを二つお願いします。」

「アイスティーが二つ、レモンケーキが二つですね。合計1080円になります。よければお席までお運びいたしますのでお座りになってお待ちください。」

他の店員が注文を受け俺に伝票がまわってくる。

そこまで難しい注文ではないのですぐに準備して席に運ぶ。

今日みたいに、お客さんが少なくて時間があるときは席まで運ぶことはよくある。

先程注文したお客さんを見つけ席まで運ぶ、ひとりで座ってるけど二人分も食べるのかと感心しているとその少女の向かい側に金髪の

少女が座った。

「お待たせいたしました。アイスティーとレモンケーキになります。」
そう言ってからそれぞれ座っている人の前に一つずつ並べる。

「ごゆっくりどうぞ。」

席を離れようとしたとき、

「あら、ここでバイトしてたのね四宮くん。」

見間違いないようになったのか。

「久しぶり、白鷺さん。」

「さん付けはやめてほしいのだけど？」

「わかった、それよりこの子は友達？」

そういつて水色の髪 of 少女を見る。

「あ、あの千聖ちゃんの友人の松原花音です。えっと、あなたは？」

尋ねたわけではないんだけど、すこし上擦った声で教えてくれた。

「白鷺の古い友人の四宮匠です。」

でも、白鷺に友達か。

「幼なじみでしょ、四宮くん。」

「そこは訂正する必要はないと思うけど。」

何で少し拗ねたんだ。

「千聖ちゃんて幼なじみいたんだね。教えてくれれば良かったのに。」

「ええまあそうね、幼なじみってもうひとりいるんだけれどちよつと色々あってね話しくかったのよ。」

二人の空気が出来上がり始めたので軽く会釈をして席を離れる。

カウンターに戻りレジ担当の人に知り合い？なんて聞かれたので
友達が来ててなんて話をしつつ、新しいお客さんが来るまで待つ。

けれどそれ以降お客さんはなく、閉店の時間になった。割りと早く
店締めすることは違い日暮れと共にお客さんが集まるライブハウス
はこれから盛り上がる時間らしいので人がすごい。

18時にお店が閉まりバイトを終えて帰る、電車に乗り最寄り駅から
家までは少し距離があるので歩きながら昼間のことを思い出す。

白鷺千聖に友達がいる、それは白鷺と再会してから少しだけ気に

なっていたことの解決になった。

昔はいろんな友達がいた白鷺だったけど、芸能活動をはじめてからというもの、新しい環境に入るときは友人を作らないなんて時もあったらしく白鷺の両親と電話しているときはかなり心配していた。

「まあやさしそうな人だったらしい友達見つけたんだな。」

思わず口に出てしまった。

「何ひとりで喋ってるの?」

「うわっ、なんだ白鷺さ。白鷺かびつくりした。」

「ふふっ、そこまで驚かなくてもいいのに、バイト帰り?」

「そうだよ、白鷺は何でこんな時間に? 割りと早く帰ってたよね?」

「花音を送ってきたのよ、あの子方向音痴だから。」

そういえば確かに昼間と服が同じ気がする。

「でも、白鷺友達出来たんだね。」

「どうゆう意味かしら?」

「いやおじさんに色々聞いててさ、ちよつと心配してたんだ。」

「そうね……。花音はいい人よ、友達になれてよかったって思ってる。」

そう言って嬉しさと安心が混ざった顔をした。

「でもまさか、四宮くんが心配してくれてたなんて思わなかったわ。」

「少し位はね、それより薫くんのこと話してなかったの? なんかすごい有名じゃない?」

薫って名前を出したとたん先顔が崩れていき、嫌そうな顔をす
る。

「少し苦手なのよ今、キャラが苦手というか。」

そんなに変わったのだろうか、昔は普通の女の子だったのに。

「そんなこと言わないで仲良くしないと。」

すこしだけ昔に戻ったような気がしつつ話していると白鷺の家が見えてくる。

「じゃあ私はここで、お父さんたちに顔見せていく?」

「いいや、また今度家族で帰ってきましたって報告に来るよ。」

「そう? また前みたいに遊びに来てね。」

「家近いからまたすぐにでもいくよ、仕事頑張ってるね。」

「ありがとう、ばいばい。」

「ばいばい。」

そういつてまた帰路につく。

なんとというか、ドラマで何回か見たこと合ったけど、別れ際にする顔って演技だとしても実際に見るとすごいなほんと。

雨宿りから自宅にて

8月上旬、毎年年を重ねるごとに暑さが増していき息苦しささえも感じる季節。

学生は夏休みに入り、部活に遊びに満喫していることだろう。部活もせず、アウトドアな友人もない（友達はいます）俺は代わりにバイト先のCIRCLE横のカフェへとほぼ毎日足を運んでいた。

今日も昼近くからシフトを入れて閉店まで働いて今はその帰り。

最寄り駅で降りて空を見上げると今にも降りそうな雲が一面真っ黒に覆っていた。

傘もないのでさつきと帰ってしまおうと早足気味に家に向かうが、家と駅のちょうど間あたりで降り始めしばらくして本降りに変わってしまった。このまま走って帰れるような状況ではなくなったので適当に雨宿りできる場所を探す。

すでに店仕舞いした雨避けが出たままの場所を見つけたので借りることにした。

「お借りします。」

ひとまずはゆっくりできるので持っていたタオルで体を拭く。

「水吸ってて服が重いな、気持ち悪いし早くやまないかな。」

そうはいつてみるがまだ止みそうになく、むしろ雨脚が余計に強くなってきた気がする。

いつまで降るのかと、思っていると人が一人こちらに走ってくる。

「白鷺?。」

「あら? 四宮君こんなところで何してるの?。」

「いや、見ての通り雨宿りだけど。… 白鷺もそうっぽいね。」

「ぽいって、こんな中走ってきたんだから当たり前でしょ?。」

「まあそうだよな。使っていないタオルあるけど貸そうか?。」

そう言いつつカバンからタオルを出す。

「ありがとう、借りるわね。」

差し出しているタオルを白鷺が受け取る。その時白鷺の格好が目

に入ったのだがあまり見ない方がい格好をしていたので目をそらす。普通の服なのだが夏用なのか薄い生地なので色々と透けてしまっているのだ。

気恥ずかしいので適当に話題を振る。

「なんで雨の中走ってきたんだ？おじさんかおばさんに迎え頼めばいいのに。」

「今日は二人とも旧友に会うからって妹も連れて少し遠くに行ってしまったって無理なのよ。四宮君の方こそ頼めなかったの？」

「うちはもともとこういう時はあんまり迎えに来てくれないし、そもそも二人とも今家にいないから無理なんだよ。」

その後仕事についてや、最近の学校の話をしたが会話は長く続かず雨の音だけがしていた。

しばらくするとあたりが暗くなり始めていたが、雨脚が弱まってきた。

体が冷えはじめ多少濡れてでももう行くこうと思えば白鷺に一言声をかける。

「白鷺、雨弱くなってきたからそろそろ俺行くけど白鷺はどうする？まだ残ってるなら傘持ってこようか？」

この前は少し遠回りして白鷺宅を迂回して帰ったが、今この場所から帰るとなると白鷺の家は少し遠いので聞いてみるけれど少し待っても返事が帰ってこない。立ったまま寝たのかと思えば肩に手をかけると簡単にふらついてしまった。

「おい白鷺大丈夫か？」

もう片方の手で支えながらも一度声をかけてみる。

「ごめんなさい、少し疲れが出ちゃったかしら。」

こちらに顔を向け返事をした。

「お前顔赤いぞ、歩けるのか？」

「大丈夫よ、私はちゃんとやんでから帰るからまた今度ね。」

そうは言っているけれど一人ではとても歩けそうにない。

このままおいて行ってなにかあってもいけないし後味も悪い。

「白鷺、お前の家に今誰もいないようだしとりあえず俺の家近いから来るか？」

「…。」

当然の反応なのだけど返事が返ってこない。

普通両親のいない男子の家なんていくら昔からの友人だから平気なわけがない。

白鷺の家まで送ってから帰ろうかと考えていると白鷺から返事が来た。

「ごめんなさい…、お願いしてもいいかしら。」

少し辛そうな声で頼ってくれる。

「わかった、まかせとけ。」

走れるから早く帰りましよと言ってはいるけれど歩くのとスピードは変わらないのでゆつくりめに帰った。

家に着き少し千聖を引つ張り気味にリビングまで連れていきソファアへ座らせる。

とりあえず濡れたままの服でいるのはよくないので着替えを部屋に取りに行きバスタオルと一緒に渡して、俺は自室に戻りそれぞれ着替える。

下着はさすがに女性ものなんでもってないし、普段使ってるのを貸すのもどうかと思ってそのままにするかと聞いたがかなり濡れているらしく新品がないか聞いてきたときはびっくりしたがちようど買ってきてあったので貸した。

部屋を出る前に毛布を持ちリビングに戻る。

リビングに入る前に一応声をかけ替え終わってるか確認する。まだ着替えの最中だったらしく少しくつめの声でまだ入らないでと

言われてしまった。

仕方ないので毛布だけ中に入れさしてもらい洗面所に行く。着替えたとはいえやはりまだ寒いので白鷺も入るだろうとお湯を張っておく。

風呂の準備を終えて廊下に出ると白鷺がいた。

身長が20cmも離れていれば当たり前前なのだがかなりだぼだぼだった、七分のTシャツにハーフパンツなのだがうえは長袖にズボンの方が七分に見える。

「風呂に入る前におじさんの連絡先教えてくれないか？一応家にいること伝えた方がいいかと思って。」

「私が伝えてもいいわよ？」

「いや俺が言うよ、それに早く風呂入って温まった方がいいと思うし。」

「そうかしら。じゃあお願いするわ、あとお風呂借りるわね。」

そう言っ紙に連絡先を書いてお風呂場に行く。顔色を見てみたが先程よりもよくなっていたので安心した。

白鷺が風呂の入っている間におじさんに電話する。

基本的に優しい人だが今回に関しては怒るんじゃないかと少し身構えてしまう。

「怒られないかな...。」

不安になりながらも何も言わない方がばれた時怖いのでダイヤルを押す。

「... もしもし白鷺ですが。」

「あ、ご無沙汰しています四宮匠です。」

「おお！高校生になってからは初めて話すな！家族の皆さんも元気にしてたかい？」

「はい、元気にやらせてもらってます。」

「ところでどうしてわたしの携帯の電話番号を知っているんだい

？」

「… ええ、実は…。」

今日起きたことをすべて間違いなくはっきりと伝える。

「そうかー、千聖がお世話になっっているんだね。実は雨の関係で今日中に帰れそうになくてね、四宮君の事情も分かったつもりでお願いするけど一晩泊めてあげられないか。もう遅いしそっちもまだ強く降っているらしいから親としては心配でね。」

「…。」

言葉に詰まる。男と一つ屋根の下に止めることは心配にならないのか？

そんな心配をしていると解決する言葉が降ってきた。

「四宮君のことは昔から知っているし任せても大丈夫と思っているから。四宮君がいいならお願いできないかな。」

「… わかりました。その信頼にお答えします。」

「ありがとう。また明日帰れそうなら千聖に連絡を入れるからと伝えてくれるかな？」

「はい、伝えておきます。」

その後数回言葉を交わした後通話を終わらせようとした時。

「ああ、四宮君。」

「なんですか？」

「順序は守ってね。」

そう言い残して電話を切られてしまった。

なんの順序ですか…！

ちょうど通話が切れたタイミングで白鷺が返ってくる。

「どうしたの？」

焦って受話器を強く戻した俺に心配そうに声をかけてくる。

「何でもない。風呂入ってくる。あと風呂から出た後話があるから少し待っててくれ。」

そう言い残し早々に風呂場に向かう、とりあえず風呂の栓は抜こう。

さつきとシャワーを浴びてリビングに戻る。

「… さつきなんであんなおどおどしてたのよ。」

すこし内気？気味の白鷺が待っていた。

「いや、なんでもない。風呂入って頭冷やしてきた。」

「お風呂で頭を冷やすって少し変じゃない？」

「そんなことないよ、ごめん飲み物も出さないで。何か飲む？」

「そうね、お茶もらえるかしら。」

「わかった、ちよつと待っててな。」

キッチンに飲み物を取りに行くついでに落ち着く。

飲み物を準備し、頭の中を整理してリビングに戻る。

「おまたせ。」

「ありがとう。」

「それでさつき話すって言ったことだけど。」

話にくいことだが話さない訳にいけないので早めに切り出す。

「さつき電話したからあらかた聞いたわ。」

「えっ。」

「歩いて帰れるって言って外見たのだけどさつきよりも雨脚強くなってきたて…。」

確かにさつきは気が付かなかかったが雨音が強くなっている気がする。

白鷺はそれ以上何も言わず少し気まずそうな雰囲気漂わせる。

こつちも電話の内容を知っていると分かったとたんになんて話すればいいのかわからない。おそらく最後のことは話してないだろう。

うと思うので電話については触れないでおく。

「そうなのか・・・じゃあとりあえず晩御飯食べよ。」

「何か作りましようか？」

「いや昨日今日の分まで作り置きしておいたからこれ食べよう。」
冷蔵庫から作り置きを取り出し温める。

その後ご飯を食べ寝る支度をして後はゆっくりするだけとなり、お互いに寝るには早いとテレビの前に集まっていた。

最初はバラエティーを見て場は繋がったのだがその後のよくわからない番組は流し見る感じになった。

眠気が出てきて動くのがおっくうに感じ眠気と戦っていると白鷺もなのかさっきの雨宿りしている時とは違う少しゆっくりとした空気が流れる。

部屋に戻らないと動かない体を動かそうとしてしていると少し離れた気味に座っていた白鷺が肩が当たるほどの距離に近づいてくる。

「白鷺？」

少し上ずった声が出る。

「昔二人の時も薫のいるときもそうだったらしいのだけどこうやってお互いにもたれかかって寝てたらしいわよ？」

そういつて言葉通りに白鷺はもたれかかってきた。

人の体温が左側に感じられる。

はじめは心臓が飛び出るほど内心慌てふためいたけど白鷺が言っていた通りそんなことがあったかもしれないと安心すると落ち着くが混ざった気持ちになる。

俺は返事をするでもなくその気持ちに体を預ける、白鷺も同じようにそれ以上言葉を続けず身を預けてくる。

眠気とは違う体の重さを感じつつ白鷺に目を向ける。

今でも4カ月も前のことを鮮明に思い出す。あの時はもう違う場所にいる人なんだと再認識した瞬間でありふさいだはずの気持ちを再認識した瞬間でもあった。

今こんなことというのは間違っている気がするけれど伝えられるな

ら伝えておいた方がいいのではないのかと思い始める。
今なら言える。

そう思い振り絞るような気持ちで声を出そうとする。

「ねえ、四宮君。」

白鷺が俺よりも先にしゃべり始めた。

「私ね、小さいころ四宮君が遠くに行ってしまったから寂しかったのよ。別にその時は四宮君以外にも友達はたくさんいて遊んでくれる子はいたけれど、みんなほんとの私じゃなくて子役としての、テレビの向こうにいる人としての私を見ていた気がするの。」

「しばらく四宮君：いえ匠君と連絡を取っていない間にみんな大きくなって、私も大きくなって子役とは違う役もやるようになってきて周りの目も変わったわ。」

「二歩置かれるというか芸能人の知り合いのような態度に変わったのね。薫はそんなの気にせず変わらなかつたけれど。」

「中学二年生くらいに匠君と久しぶりに連絡をとったとき少し怖かったのよ、匠君もきつと変わってるんじゃないかって。でもそんなことなかつた、昔のままだったわ。安心した、それで高校生になって会ったときはびっくりしたのよ?。」

「話し方だけじゃなくて私に対する接し方も変わらなくてほんとによかつた。そうね、匠君は心許せる相手って感じね。」

そう言いながらくすくすと笑った。

なんだかうれしいかつた、けれど俺が白鷺に対して抱いてる気持ちと向こうが俺に対して抱いてる気持ちは似ているようで違んじゃないかと思いだしたらいいのかわからなくなった。

「白鷺はそんな風に思ってたんだな。幼馴染って感じ。」

「昔みたいに呼んでくれてもいいのよ?。」

「勘弁してくれよ、恥ずかしすぎる。」

「そうかしら? まあ無理には言わないわ。」

それでも、今言わないともうこれからずっと言えない気がしてしま
う。

心の中で深呼吸をして今度こそと声を出す。

「なあ… 白鷺。」

「なに？」

心臓がまた早くなる。

「俺実はさ、ずつとさ。」

「千聖のことさ。」

ここから先の言葉が出ない。

出せない。

それからなかなかしゃべり始めない俺に代わって千聖が話し始め
る。

「匠君のことは好きよ。友達としてじゃなくてちゃんと。」

「でもね、今は無理なの、今はね仕事が一番大切なの。もちろん匠君
や花音だつて大切よ。二人が仕事よりも大切な時だつていつぱいあ
る、でもずつとは無理なの。」

最初は少し高揚気味に話していたけれど後に行くにつれて辛そう
な、泣きそうな顔をする。

千聖なりに考えていることがあるんだろう。その気持ちを汲み取
らないのは友人としてもこの気持ちも違うと思う。

今は友達として応援するのが正しいんだろう。

「別に今千聖悪いこと何も言っていないじゃんか。千聖のやりたいよ
うにやればいいじゃんか。」

何を言いたいのか自分でもわからなくなってくるけれど励ましてあげたいのは本当なのでそんな言葉を思いつくだけ並べる。

それでも千聖は泣きそうからほんとに泣き出してしまつて余計にどうしていいかわからなくなる。

しばらく千聖は泣き続けそのまま寝てしまった、腕を掴まれそのままなので俺自身動きが取れずにいる。

時計を見るととつくに日はまたいでいてその確認が取れたとたんに眠気に襲われそのまま体の力を抜いていく。

翌朝起きると白鷺もちょうど起きて乾かしておいた服を着て迎えに来た両親と一緒に帰っていった。

家に一人になり昨日のことを思い出す。

あの会話は今朝話すこともなく消化不良で終わった。

白鷺のあの顔は多分忘れられない、俺があれを話し始めなければあんな雰囲気にならなかつたのか。

悶々としたまま時間だけが過ぎていった。

公園にて

夏の猛暑が終わり夜は肌寒さを感じるようになったこの頃、昼間も晴れより雨が降っていることの方が多く寂しさと鬱陶しさを感じている。

鬱陶しく感じるのには雨だけじゃなくあの日のことを思いだして胸の底にあるもやもやしたものの原因をどうしようもできない事からくる虚しさが邪魔で邪魔で仕方なかったから。

夏休みが終わる前にもう一度会って話をしようと思っていた白鷺のお父さんの電話に連絡しようとしたこともあったけどその後どうすればいいのかわからず途中でやめてしまった。

それからというもの自分では気が付かないほど悩んでいたらしく行く場所行く場所でなにかあったのかと心配をかけてしまった。

「はあ…。」

通学路の途中にある公園のベンチに座りため息をつく。

自分はどうすればいいのかわからず暇があればあの日どうすればよかったのかと意味がないのは解つていても考え込んでしまう。

白鷺といえばテレビでしか姿を見てないけれどいつも通り変わらない様子だった。

私生活では俺と同じように悩んでいるんだろうか、これほどでなくても少しくらいは。なんて考えていつもたどり着くのは自分が考えるなかで一番嫌な場所。

自分の頭の中の事なんだからいい方向に考えればいいのに、とここまで進み無駄なことだと今までの事を無理やり頭から忘れさせる。

今日は久しぶりの晴天で朝は水溜まりに日が反射して眩しかった。

今の空は茜色に染まり冷たい空気が流れていた。

「そんな怖い顔をしてどうしたの？」

耳障りのいい明るい声が急に横から聞こえ少し驚く。

金髪の長い髪に大きな黄色い瞳、前髪は綺麗に斜めに整えられていて顔は天真爛漫という言葉が似合うこちらもつられて笑ってしまい

そんなほどの笑顔だった。

いつまでも驚いてられないと見ず知らずの相手に返事をする。

「えっ、と。誰？いつからそこに？」

返事になってない返事だなどもっと考えてから返事をすればよかつたど悔やむ。

「さつきからよ？そういうえば自己紹介がまだだったわね！あたしは弦巻（なづな）ころろ！こころろって読んで！あなたは？」

「俺は四宮匠。呼び方は任せるよ。」

「じゃあ匠ね！それじゃあもう一度聞くけど何でそんな怖い顔をしてるの？」

「いや。そんな初めてあった人に話すようなことじゃないから。だから、えっと。」

会話をしてるにしてもやはり頭のなかで驚きは消えておらずどうやってこの場を切り抜けるかの言い訳が上手く出てこない。

こころろという女の子はこちらの話を聞いている様子はなく何故まだ話さないのかと不思議そうな顔をしていた。

普段ならこんなこと他人に話すきにもならないけれど誰でもいいから相談したい気持ちが強くてでてきて自然と口から言葉がこぼれていく。

「小さい頃からの友達と：何て言えばいいのかな、気まづくなっちゃって。前みたいに仲良くしたいんだけどどうやって仲直りすればいいかわかんなくてこんな顔してたのかもしれないな。」

「そうなのね。友達と仲良く話せないのは嫌なことよね。それじゃあちゃんと話をしにいけないと思うのだけどどうかしら！」

それができればいいんだけど…。

「そんな簡単にいかなくてね…、ほんとにどうしよ。」

またまた不思議そうな顔をしてこころろを見ってくる。

「どうして話に行かないの？貴方のお友達だつてきつと仲直りしたいはずだわ！笑顔でいた方が絶対いいもの！」

「そうかな、そうなのかもしれないな。」

こころろの絵に書いたような笑顔を見てると何でもできるような

気がしてきて、今からでも何か出来ないかと少しそわそわしてしま
う。

「あら、怖い顔が明るい顔に変わったわ！あ、あたしもう行かないと。
それじゃあね！」

そう言っただけで走って何処かに走り去ってしまった。

「…今日の夜連絡とってみるかな。」

そういって家へと足を向ける。公園に来る頃より足取りが軽く
なっている気がした。

番外編 クリスマス

12月22日

朝目を覚ますと外は雪が降り始めていた。布団から出ると肌を刺すような寒さに襲われ布団に戻ろうかと思ったけれど、お腹もすいているし、リビングの方が温かいだろうと部屋から出る。

リビングへ行くと予想していた温かさとは程遠い寒さに満ち満ちていた。

両親はまだ起きてこないのかと、時計を確認すると午前10時を示しており流石におかしいと思い両親の部屋へ向かおうとすると家のインターホンが鳴った。

寝間着姿だけどまあいいかと思いつのまま玄関へ向かう。「待たせてしまってすみません。」

扉を開けるとより寒い風が室内へ流れ込み少し顔がゆがむ。早々に相手の要件を聞いて部屋に戻りたいと思っていると予想外な相手が玄関前に立っていた。

「四宮君、まだそんな恰好しているの?」

「なんで白鷺がこんなところにいるの?」

「なんでってごおじさん達から話聞いていないの?」

「何も聞いてないはずだけど...。とりあえず部屋に入っつて。」

白鷺をリビングに通してから、両親に話を聞こうと部屋に向かい扉を開けるとそこには誰もいなかった。

電話で確認しようとスマホを見ると一通のメッセージが父親から来ていた。確認してみるとんでもないことが書かれていた。

内容は「これから年末にかけて白鷺さんの家と旅行に行つてきます。年始はおじいちゃんたちの家に行つてから帰ります、匠も電話し

てね。あと千聖ちゃんの仕事があるから一緒に行けないそうで家に一人にするのも心配だから家に来てもらうことにしました。仲良くしてるんだよ。」とのこと。

「え…?」

リビングに戻ると白鷺は特にすることもなさそうに部屋の中を見渡していた。

「ごめん白鷺、今さつき親から話聞いたところでちよつとうん。」

「大丈夫よ、私も四宮君の家で過ごしなさいって言われたのは昨日だから。」

「まだ俺たちって小学生かそこらだと思われてるのかな。」

「そうなんじゃない? まあ黙って家で一人過ごしてもよかつただけどばれた時がこわいから。これから大体一週間よろしくね。」

「…よろしく。」

まずはお互いの予定を確認と何をするのか話し合ことにした。

白鷺は今日の収録で今年の仕事は終わりらしく後は25日に学校へ行けばもう冬休みへ突入するらしい。

俺は学校もバイトも25日に終わるのでそれから6日はお互い家の中で過ごすってことで話はまとまった。

その後は白鷺の部屋を決めて布団を出しどこに何があるのかだけ説明して、あとはそれぞれの予定を消化していった。

12月24日

昨日の朝は白鷺がいる事に驚いたけれど2日目となればそこまで驚くこともなくなった、今日は夕方からライブとその後バンドメンバー達とクリスマスパーティーがあるから夜帰るのが遅くなるらしい、それまで何か家事をしようかと言われたけれど申し訳ないから断った。

今日は午後からバイトなのでそれまで何をしようかとリビングでぼーっと考えていると目の前に座った白鷺から明日の帰りはいつなのかと聞かれた。昼間には学校が終わりバイトして帰るだけなので暗くなる前には帰ると伝えた。

その日はそのままリビングで過ごしお互いにバイトとライブで一日は終わった。

夜、少し白鷺と話をした時妙に明日の予定を聞かれたけれどなんなのか。

12月25日

それぞれ学校に向かい、予定していた通りに時間は進み気が付けば今年最後のバイトも終わっていた。

帰り道、ふと目に止まったネックスが気になって店の中に入ると、思っていた以上に高そうな内装で尻込みして回れ右で店から出ようとしたところ店員につかまってしまった。

外に気になるものがあつたから入っただけだからと少し逃げ気味に店員と話しているとその商品を店員が持つて来ていた。あいまいに断らなければよかったと後悔しながら値段に目を落とすと思っていたよりもお手頃で思わず買ってしまった。

「クリスマスだしいいよね。」

そう言って自分を納得させて家へと帰る。

家に着くと明かりがついていてなんだかほっとした。

いつもは家に帰っても明かりがついておらず寂しさを感じていたからだろうか。

なんとなく「ただいまー。」

と言ってみると「おかえり。」

と奥から声が返ってくる。

少しむずがゆさを感じながらリビングに行く料理が並べられていた。

「これ白鷺が作ったの？」

「少しだけね。ほとんどお惣菜だけど。」

どれが手作りなのかわからないのは黙っていた方がいいのかもしれない。

「じゃあ食べましょうか。」

それからのご飯の場だからかいつも以上に話が弾み気が付けば8時になっていた。

白鷺はもう風呂を済ませていたらしいので食器の片付けもやるからはいてきていいよと言われたのでお風呂につかる。今日は特に寒かったので湯船につかった。今思い返すとなんでネックレスを買ったのかわからない、なんて言っただけで渡せばよいのやら。

風呂から出ると白鷺はまだリビングのソファの上にいた。

「部屋に戻ってないんだね。」

「ええ、ここ温かいから。あまり出たくないのよ。」

「なるほどね。」

「ところで四宮君、マフラー持ってないのね。」

「そういえば去年駄目にしてから買ってないな。」

「そう思ってマフラー買ってきたのよ、風邪ひいちゃってもいけないし。はい。」

そう言っただけで紙袋を渡される、開けてみると紺色のマフラーだった。白とか赤みたいなのは明るい色だったらどうしようかと内心ひやひやしたけれど俺の趣味をわかってくれていてよかった。

あれ、今なら渡せるんじゃないか？

そうだ渡してしまおう。

「あー、白鷺。」

「どうしたの？」

「実は俺もプレゼントがあつて。あ、マフラーありがとう。」

ぎこちなく鞆の中から箱を取り出す。やっぱりちよつと気持ち悪いかなど思いながら出してしまったものは仕方ないのでそのまま白鷺に渡す。

「なにこれ？」

「ネックレス、帰りにいいなと思って買ってきた。もつといいやつ持ってるかもしれないけど、できれば受け取ってほしい。」

「そんなことないわ、とつても嬉しい。」

「できれば……つけてくれない？」

「いやそれはちよつと。」

「なに？いやなの？」

「いいいやじゃないです。やらせていただきます。」

若干脅迫され気味に箱からネックレスを取り出し白鷺に着ける。白鷺との距離がかなり近く、緊張で手が震える。

何回かやり直してやつとつけ終わり離れようとする。白鷺から声がかかる。

「つけ終わったかしら。」

「うん、つけ終わったよ。」

この会話の後すぐのこと。

白鷺が前に倒れそのまま腕を後ろに回す。

「白鷺さん？どうしたの？」

「いいえ、何でもないわ。しばらくこのままできていいかしら。」

「かまいませんとも。」

拒否してもこのままな気がしたので白鷺にされるがままになる。

「……四宮君は腕回してくれないのかしら。」

「いいの？」

「むしろ待っているのだけど。」

「……」

失礼します。と心の中で断りを入れて白鷺の背中に手を回す。

まさかこんなことになるとは思っていなかったから心臓がいまままで立てたことがないような音がしている。

けれどそれが気にならないくらい心地良い暖かさですつとこのままでもいいかなと思ってしまう。

正直男だつたらここから先のことも考えてしまうけれど、多分今はそういう感じじゃないんだろうと何となく感じる。

「四宮君は、好きな女の子とかいるの？」

「共学だから一人くらいいるんでしょう？」

「……好きな人はいるよ。誰とは言えないけど。」

「ふふっ。まあいいわ他の子だったらすぐに言っただけ。こんなことしないから。」

「弄んでる？」

「そんなことないわよ。…じゃあここまでにしませう。」

そう言っただけで白鷺は離れてしまった。

少しだけなくなってしまった寂しさがあるけれどそんなことを言える関係でもないからと我慢する。

「そろそろ寝ましようか。」

そういってソファから降りて部屋へと戻ってしまった。

リビングの電気を消して自分も部屋に戻る。

今日はいろいろと疲れた、明日からどんな顔して会えばいいんだ。

残り5日の気苦労を考えながらゆっくと目を閉じた。